

江戸期古銭書『奇抄百圓』(1789年)中のパスパ文字と満洲文字

吉池孝一

江戸時代は寛政元年(1789年)刊行、河邨羽積の撰になる古銭書に『奇抄百圓』(古代文字資料館管理)がある。その中に「手替四十八寶」(第十七葉)と題して貨幣の銘文に使われる様々な「寶」字を集めた部分がある。主に漢字の異体字を集めているのであるが、「寶」を音写したパスパ文字と満洲文字もある(下図参照)。

第三十八を見ると、「蒙古 モウコ」の見出しのもと、パスパ文字で pav とある。寶字のパスパ文字の表記は正しくは bav であるから、本書の **𑖓**p は **𑖓**b の誤刻ということになる。第三十九を見ると、「韃 ヲツ」の見出しがある。これは韃靼(ダツタン)すなわち満洲のことである。この見出しのもと満洲文字で boo とある。こちらの綴りに問題はない。

満洲文字のほうは同時代資料であるから、boo を「寶」に当てたとしても驚くにあたらないけれども、パスパ文字は元の滅亡とともに滅びた文字である。後代においてこれを正しく認識するには一定の手続きが必要であり、それほど容易なことではないであろう。もっとも、河邨羽積なる人物が、このパスパ文字を分析的に理解していたものか、ひとかたまりの文字として「寶」に当てたものか分からない。あるいは理解せずに先行の書をそのまま引き写したということであるかもしれない。この僅かな記述だけでは何とも言えないのであるが、元が滅亡しパスパ文字使用の伝統が絶えてから、中国や日本の人たちがこの文字に対してどのような認識を持ちそしてどのように読み解いたかということについて、パスパ文字研究の前史として知りたところであり、これを表面に浮かび上がった一例として捉えるならば興味深いものとなる。



